医療系研究科論文博士用

学 位 論 文 要 旨

氏 名 河野 照子 印

論 文 題 目

「Usefulness of labor induction in pregnancies complicated by preeclampsia」

(妊娠高血圧症候群における分娩誘発の有用性)

指 導 教 授 承 認 印
海野 信也 印

「Usefulness of labor induction in pregnancies complicated by preeclampsia」
（妊娠高血圧症候群における分娩誘発の有用性）

氏名　河野　照子

妊娠高血圧症候群（preeclampsia、PE）の最終的な治療は妊娠の終結である。分娩方法として諸外国では分娩誘発の有用性が示されているが、日本では分娩進行中に生じる高血圧増悪などの合併症を懸念して帝王切開が選択されることが多い。本検討では PE における分娩誘発について考察する。

目的： PE における分娩誘発を達成しやすい条件について検討する。

方法： 2008～2013 年に北里大学病院で出産した PE 患者 195 例を対象とし、患者背景、PE 発症週数、分娩週数、PE 重症度、子宮口開大度、分娩様式、児の予後について後方視的に検討した。妊娠終結の判断は、早産である妊娠 37 週未満では加療により可能な限り妊娠継続を図り、コントロール不良な高血圧、5 g/日を超える尿蛋白、血小板 100,000/μL 未満、常位胎盤早期剥離、HELLP 症候群、胸水貯留、胎児機能不全などが出現した際には分娩とした。正期産である妊娠 37 週以降では積極的に分娩とした。分娩様式の選択は、妊娠 34 週以降および推定児体重 2,000 g 以上を分娩誘発の原則条件とし、さらに子宮手術既往や骨盤位妊娠などの禁忌事項が無ければ分娩誘発とした。分娩誘発には区域麻酔（脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔もしくは持続硬膜外麻酔）を併用した（4 例を除く）。高血圧に対しては、血圧が重症（160/110 mmHg 以上）に及ばないように必要に応じて降圧薬内服もしくは持続静脈内投与を行った。

結果：195 例中 108 例に選択的帝王切開、87 例に分娩誘発を行い、75 例（86%）で経腟分娩を達成した。分娩週数による分娩様式の検討では、妊娠 35 週未満では 25 例中 23 例（92%）で帝王切開が選択されたのに対し、妊娠 35 週以上では 89 例中 85 例（96%）で分娩誘発が選択されており、妊娠 35 週を境に選択される分娩様式に変化がみられた。最終分娩様式が帝王切開 （分娩誘発後帝王切開を含む） であった割合は妊娠 33～34 週：78%、妊娠 35～36 週： 29% であり、妊娠 33～34 週が妊娠 35～36 週よりも有意に高かった（$P<0.02$）。

PE 発症時期による分娩様式の検討では、早発発症（妊娠 32 週未満）のうち妊娠 35 週未満に分娩した 16 例は全例帝王切開が選択されたのに対し、妊娠 35 週以降に分娩した 9 例中 7 例（78%）は分娩誘発を達成した。早発発症では分娩時期が妊娠 35 週以降の方が 35 週未満よりも分娩誘発達成率が有意に高かった（P<0.01）。

PE 重症度による検討では、妊娠 35 週以降に分娩誘発を行った軽症 PE 44 例中 39 例（89%）、重症 PE 41 例中 34 例（83%）で分娩誘発を達成しており、分娩誘発達成率に PE 重症度による有意差を認めなかった（P = 0.48）。

子宮口開大度による検討では、初産婦では開大 1.5 cm 以上の 22 例中 21 例（95%）、開大 1.5cm 未満の 32 例中 24 例（75%）で分娩誘発を達成しており、1.5 cm 以上で有意に分娩誘発達成率が高かった（P<0.048）。経産婦では 29 例中 27 例（93%）が分娩誘発を達成しており、開大度による差はみられなかった（P = 0.070）。

選択的帝王切開群と分娩誘発群の両群間に Apgar score や臍帯動脈血ガスに有意差はみられなかった。分娩誘発後に帝王切開を必要とした症例は 12 例で、胎児機能不全 5 例、分娩停止 7 例であった。胎児機能不全の 5 例中 2 例は羊水過少と胎児発育停止を伴っていた。分娩停止の 7 例中 6 例は子宮口開大度 1.5 cm 未満であった。

結論：妊娠 35 週以降では高確率で分娩誘発を達成できた。分娩誘発達成率に PE 発症時期や PE 重症度は影響しない。早発発症であっても加療により late preterm まで妊娠継続できれば、経腟分娩できる可能性が高まる。初産婦ではその達成に子宮口開大度が影響する。適切な分娩管理を行うことにより、late preterm 以降の PE において分娩誘発は有用な分娩方法と考えられる。